

下総の歴史と今をのぞいて見る  
京成本線で 八千代台から成田へ

これまで各地へ出向いて、その土地の鉄道路線のことについて駄文を書いてきたが、今回は趣を変えて、自分が住んでいる町の最寄り駅である京成本線（京成成田線）の八千代台駅と勝田台駅を取り付き点にして、下総の歴史と今を重ね合わせながら書いてみることにした。

八千代台から成田に向かう各駅停車に乗った気分で、各駅を眺めながら走ってみると・・・・・・・・。



### < 1 > 八千代市の歴史と八千代台

旧石器時代の遺跡が数多く残されており、このあたりには約3万年前に人が住んでいたと言われている。江戸時代には佐倉藩領・天領・旗本領などに分けられていた。この時代には成田山参詣の道として多くの人々が往来し、大和田には宿場町も形成された。

明治17年、現在の八千代市の南西部が陸軍の習志野演習場の用地として買収された。明治政府の富国強兵・殖産興業政策から始まり昭和20年の太平洋戦争の終結に至るまで、我が国の戦争の歴史の基盤となる場所だった。大正・昭和の地図を見ると、現在の八千代市高津には巨大な兵舎や厩舎があり、千葉駅周辺には鉄道連隊・陸軍歩兵学校、津田沼駅周辺には騎兵旅団司令部、そしてこれらに囲まれるように存在する広大な習志野が原には演習場、各々の拠点を結ぶ軍用鉄道が走っていた。(註①)

北は柏市あたりから南は千葉市まで、東は四街道市・佐倉市から西は松戸市あたりまでが、その効用と有意性はともかくとして我が国の軍事力の下支えをしていた。

明治32年、市町村制の施行に伴い、千葉郡大和田村・千葉郡睦村・印旛郡阿蘇村などが誕生。

明治34年、大和田村は町制に移行し、大和田町が誕生。

昭和元年、関東大震災後の混乱の中で、自警団による朝鮮人虐殺事件が発生。

昭和4年、京成本線が開通し「大和田駅」が誕生。昭和20年、終戦。

昭和29年、千葉郡大和田町と睦村が合併して八千代町が誕生。同年、一時置いて印旛郡阿蘇村を吸収合併。

八千代という町名は公募によって決定したとのこと。

私見だが、広大な陸軍用地の中にあつたこの地には軍の関係者が少なくなかつたと思われる。「千代に八千代

にさざれ石の・・・」という歌詞の影響を受けたのではないだろうか。

昭和 30 年、日本住宅公団により日本最初の住宅団地「八千代台団地」が誕生し

昭和 31 年、京成本線に「八千代台駅」が誕生、昭和 42 年に市制に移行し八千代市が誕生し千葉郡は消滅。

昭和 48 年にこの地に転居してきたが、八千代台駅の西口には八千代台団地があり自衛隊の習志野駐屯地があり、商店街も賑わっていたが東口には商業施設など何もなく、赤土の平原が広がっているだけだった。冬の風の強い日には赤い土埃が舞い上がり、西部劇の決闘シーンを見るような光景だった。東側の千葉市には花見川団地もできて人口急増が始まっていたが、駅の東側はまだ開発が始まったばかりの状態だった。

そして他にも団地がいくつもできて、商業施設も完備されて東側には西部劇の撮影をできそうな場所はなくなってしまった。

平成 12 年、八千代市の人口は 15 万人を突破したが、バブル崩壊・外国人の流入・高齢化・人口減少などの社会変化を経て、今再び激変の危機にさしかかっているように見える。バブル最盛期に東口商店街に君臨した商業施設の中心だったユアエルム（ながさきや）・ポポ（十字屋）・ラオックス（家電量販店）の頭文字を取って、駅前通に「エボラ通り」と命名されたが、平成 29 年現在生き残っているのは道路の名前とユアエルムだけで、建造物そのものが消えてしまったものさえある。

## < 2 > 大和田

大和田という地名は全国に数多く存在する。地名の起源は一般的には「大和田氏が治めた」というものと「川が屈曲したところ（輪処：わど）」に美称「おお」が付いたものとの二つに大別されるらしい。

この地は大和田氏とは関係しないことから後者ではないかと言われているが、大和田駅周辺の成田街道周辺を眺めてみても、美称付きで言われるほどの「屈曲した川の流れ」は見つけられなかった。個人的には、この説はすんなりとは受け入れられない感じがしている。

成田街道を歩いてみると、立派な構えの大和田宿の名残と思われるような味のある建物に出会うことがある。大和田駅は八千代市に属するが、駅の南側は八千代市と千葉市の境界になっていて、10 分も歩けば千葉市花見川区に入ってしまう。千葉市側に入るとすぐに、日本で最初の英国式のゴルフ場として昭和 7 年に完成した鷹之台カンツリー倶楽部が花見川沿いに広がる。

京成電鉄開通当時は主要駅で折り返し電車も走っていたこの駅は、今では特急が停まらない静かな駅になってしまった。

## < 3 > 勝田台

大正時代の国土地理院の地図を見ると、東京湾に注ぐ花見川の支流勝田川の北岸にある台地に「勝田台」と記されており、その西側の集落に勝田という表記がある。江戸時代には勝田村が存在し、また鎌倉時代の文

献を見ると、勝田という地名が存在していたらしい。

台地の縁の崖を意味する「かち」、処(ところ)を意味する「た」が地名の起源で、後に縁起の良い文字を当てて「勝田」となったという説が有力なようだ。

大正時代の地図に載っている「勝田台」は勝田川北岸の河岸

段丘のような所で、現在の地図を重ね合わせてみると勝田台団地の最南端（勝田台 6 丁目）になる。また勝田という集落は段丘の下の川沿いに広がっており、今もその昔を思い描けそうな雰囲気のある集落である。



勝田台も台地の縁も、勝田集落もすべて現在の勝田台駅からは遠く離れた所にあるので、駅に降り立っただけでは地名の起源を感じることはできない。

#### < 4 > 志津と臼井 (京成臼井)

志津次郎胤氏の居城 (志津城) があった。志津城は、兄である臼井祐胤が城主である臼井城の支城のひとつ。正和 3 年 (1314 年) 臼井祐胤が他界すると、生前の約束により息子の竹若丸を成人まで志津胤氏が養育・後見することになった。しかし、胤氏は 3 才の竹若丸を殺して臼井城を乗っ取ろうと企てた。これを察知した乳母おたつが岩戸城主岩戸五郎胤安の力を借りて竹若丸を救出して鎌倉に逃がすが、おたつは胤氏に殺されてしまう。鎌倉で成人した竹若丸は新田義貞に付いて鎌倉攻めに加わる。建武の中興を経て足利尊氏に付き、臼井氏の惣領と認められ臼井興胤と名を変えて臼井城に戻る。

志津胤氏はしばらく臼井興胤に仕えたが、興胤の策略にはまって城を襲われ自害。胤氏の妻は城に火を放って抗戦したが命を落とした。これにより志津城は消滅したと言われている。

志津駅から隣の臼井駅までは、この歴史ドラマを体感できる車窓だったのだが、二駅の間コンクリートの町が出来て、ユーカリが丘というバター臭い駅ができてしまった。

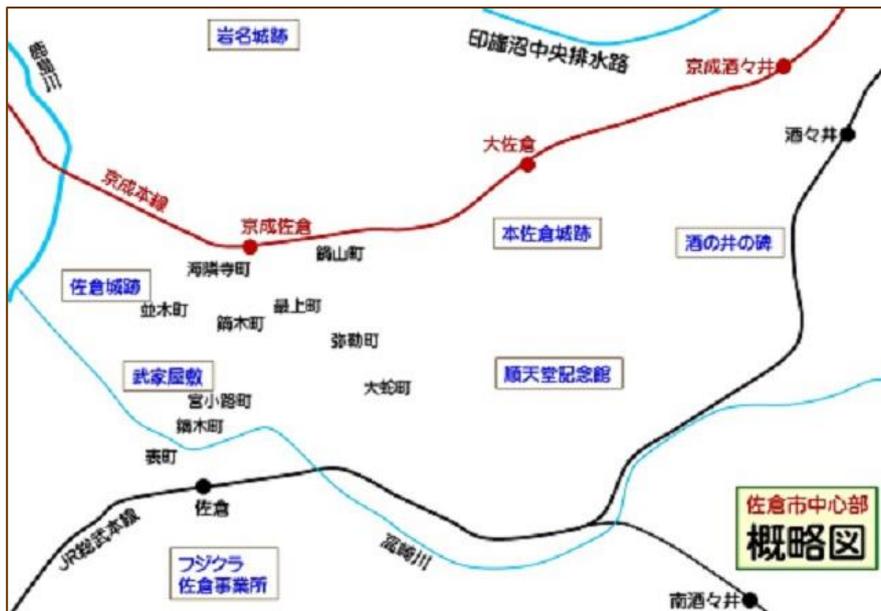
臼井駅を出た電車が進路を北東から南東に変えるあたりが印旛沼に最も接近する地点になる。右の車窓は台地の縁で左の車窓には印旛沼、冬の夕暮れ時には思いがけぬ美景にであうことがある。

#### < 5 > 佐倉 (京成佐倉)

昔この地で作られた麻布を朝廷に納めるための蔵があったことから「あさくら」が転じて「さくら」となったという説と、「さ (清い・清々しい)」「くら (蔵)」という説があるようだ。いずれにせよ蔵がある集落だったらしい。

佐倉市の南部から八街へ行く道の途中に「麻倉ゴルフ倶楽部」というゴルフ場があるのを思い出したが、この名前は地元の歴史 (佐倉の地名の由来) から付けた名前なのかもしれない。

佐倉には京成佐倉と JR 佐倉の二つの駅があるが、南北に 2Km 弱離れている。



京成佐倉駅南口に降りて地図を見ると、並木町、鍋山町、鍋木町の西には海隣寺町、・・・何か由来が気になるような町の名前ばかりが並ぶ。佐倉城跡の敷地には国立歴史民俗博物館が建ち、いくらか昔の面影は消えているが、城下町を歩くと武家屋敷や旧家が残っており興味深い。

市内の随所に旧石器時代から縄文時代のものまで数々の遺跡があり、この地の歴史の古さを感じる。

鎌倉時代に入り千葉氏の支配下に入り、千葉氏は本佐倉城を構える。

千葉氏は小田原北条に付いていたが、北条氏が破れると没落の道を辿り、やがてこの地は徳川の家臣や一門の支配下になる。

慶長 15 年 (1610 年) 土井利勝が佐倉の領主となり、7 年の歳月を要して佐倉城を築城し城下町も整備された。その後堀田氏の代になって、藩校を整備するなど教育に力を入れられ、洋学が取り入れられ、蘭医学塾兼診療所「順天堂」が作られた。

そして明治維新以降になると、佐倉に陸軍歩兵連隊が設置されることになり、これまでに作られた物によって急速に軍隊色が強くなっていく。

#### < 6 > 大佐倉 (おおさくら)

駅名は「おおさくら」だが、地名としては「おおざくら」と読む。何故こうなったのかはわからない。

佐倉市大佐倉と酒々井町本佐倉（もとさくら）の間にある将門山に本佐倉城があり、千葉氏最後の頃に拠点の城だったが、後に一国一城政策により消滅して現在の佐倉城に座を譲った。本佐倉城から印旛沼方面を見下ろすと広がる大平原を「大佐倉」と言ったらしい。また将門山、将門町という地名は、その昔平将門の父である平良将が治めていたことに由来する。

#### < 7 > 酒々井（京成酒々井）

分断された印旛沼を結ぶ印旛沼中央排水路が南に大きく湾曲して京成電鉄の線路に最も接近したところに京成酒々井駅がある。排水路を挟んで対岸の高台にあるのが順天堂大学。

印旛沼の近くに年老いた父親とこれを養う親孝行息子が住んでいた。息子は一生懸命働いてお酒が好きな父親にお酒を飲ませていた。ある日酒が買える銭が工面できずうちしおれて歩いていたら、路傍の井戸から何とも言えぬ良い香りが漂ってきた。口にしてみるとそれは井戸水ではなくお酒だった。ところが、この井戸水は、この孝行息子が汲むと酒になるが、そのほかの人が汲んでもただの水だった。孝行息子に天が授けたと言われた。本佐倉城の東側にある円福院神宮寺の境内にあったと言われており、平成 19 年頃に復元されて、「酒の井の碑」と書いた看板が建っているとのこと。

#### < 8 > 宗吾参道

昭和 3 年開業時の駅名は「宗吾」だったが、昭和 5 年に少々手前（上野側）に移転し、昭和 26 年に「宗吾参道」と改称。印旛郡酒々井町と成田市の境界に位置し、駅名の由来である「宗吾霊堂」は成田市側にある。江戸時代に公津（こうづ）村の名主木内惣五郎、堀田氏の重税政策に悲鳴を上げる農民のために将軍への直訴を行い、それがために死罪となったことから「義民佐倉惣五郎（宗吾?）」として有名になり、講談や歌舞伎でも演じられるようになった。東勝寺の住職が公津村の刑場に埋葬して弔ったことから、この寺に宗吾霊堂という御廟が建ち今日に至るが、今でも実在説と非実在説があるらしい。木内惣五郎の実在は確からしいが、発生した一連の事件の事実関係は藩や幕府にとって不名誉な内容でもあるだろうから、史実がそのままに伝えられはしないのではないのかとする見解もあるようだ。

#### < 9 > 公津の杜（こうづのもり）

小さなトンネルとは言え京成電鉄では唯一のトンネルをくぐり抜けると成田市に入り、これまでの水と緑の景色とは打って変わってコンクリートの町が視界に入ってくる。モダンな駅舎には「公津の杜」という一見格好は良いがよそ者には読みにくくて覚えにくい駅名が書いてある。駅の北側にわずかに残された緑があるものの、殆どの景観の中には「植樹された緑地」しか見えず「杜」と名付けたイメージと似つかわしくないのが残念である。このあたり、昔は公津村と言ったので素直に「公津」と名付ければ良かったのに、と思う。この駅は、宅地開発と街作りに合せて平成 6 年にできた新駅だが、もう 20 年以上経ってしまった。国際医療福祉大学ができ、成田空港関係の仕事をする人が住み、膨らんだ成田市のベッドタウンでもあり、首都圏のベッドタウンでもある。

#### < 10 > 成田（京成成田）

公津の杜を出た電車は、前方に成田山新勝寺のいくつかの建物を眺めながら、さらに空港上空の飛行機をも眺めながら成田の町に入っていく。右から J R 成田線の線路が近づいてくるので、同じ駅舎に入るのかなと思いきや、交差して左右が入れ替わり、道路を挟んで別の駅舎に入ってしまう。他の鉄道会社の路線との乗り換えが可能な駅が日暮里以外にはないという評判の悪い京成電鉄はこの駅でも不評を買うのだが、成田空港駅では何と J R ・成田スカイアクセス線・京成本線が同じ駅舎の中に入ってくれた。（註②）

江戸時代またはそれ以前から成田山参詣の客で賑わった成田。陸路を長い時間をかけて歩いて来た参詣者には信仰のありがたい御利益があったに違いない。そして鉄道が開通したことで道路が持つ役割が終って、多くの人々は電車で出かけるようになった。

昭和 40 年代後期には、京成成田線（本線）の電車にはかつぎ屋のおばさんが多数乗っていて、農作物や魚介類が首都圏に運び込まれていた。走る電車の中で行われているかつぎ屋同士の商品交換なども何度も見たことがある。しかし時の流れには抗うことは出来ず、大型商業施設の展開などによりこうした商売の居所がなくなってしまった。

そして国際空港ができたことにより、京成電車の乗客は国際化した。大きな旅行カバンと意味不明な言語の

往来が通常の光景になり、成田の町中を歩いても外国人とすれ違うことが当たり前になった。  
何百年の昔から成田山（不動尊）信仰で賑わった町は、飛来する外国人を受け入れる国際都市に生まれ変わり、京成成田線はそれを支える重要な基盤のひとつに生まれ変わった。

以上

◆参照情報・参考資料

註-① 習志野が原の軍用鉄道・・・ <http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/guntetsu.pdf>

註-② 北総線（成田駅アクセス）・・・ <http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/hoxosen.pdf>